

模擬授業の前段階で行う活動の評価

—モデル授業の分析と模倣—

Evaluation of Activities Before a Mock Lesson: Analysis and Imitation of a Model Lesson

篠崎 文哉

大阪教育大学

Fumiya SHINOZAKI

Osaka Kyoiku University

Abstract

The purpose of the present study is to evaluate activities in elementary school English teaching methodology classes. There were two parts of the activities. In the first activity, students watched a model elementary school English lesson and analyzed it with a partner using Google Jamboard. In the second activity, students tried to imitate the model lesson in a group, based on their previous analysis. They took turns playing the roles of the teacher, the ALT, and the student. A questionnaire was then administered after each class. The descriptive texts were then analyzed with the qualitative data analysis software, KH Coder. The results indicated that, on the premise of imitating a demo lesson, class analysis could lead to more detailed class observation. In addition, reenacting a demo lesson would enable students to experience smooth teaching. However, since the model lesson was an excellent demonstration, it was observed that such quality was difficult to reproduce completely.

1. はじめに

学習指導要領が改訂され、小学校では2020年度に教科としての英語教育が開始された。それ以前に、小学校外国語活動の教科化について、小学校教員がどのような不安を抱いているのかが調査されている。例えば、米崎・多良・佃（2016）が小学校教員にアンケートを実施し、回答を分析した結果から、発音などの英語力や評価の実施に関して不安を感じていることが分かっている。最近では、株式会社イーオン（2021）が英語を教科として教えている小学校教員を対象にアンケートを実施したが、英語授業が「うまくいっている」「おおむねうまくいっている」と感じている教員が27%であったのに対し、「あまり自信がない・不安のほうが多い」「あまりうまくいっていない」と感じている教員は

33%であったことから、教科として英語を指導することについての不安が、十分に解消されているとは言いがたい。また、同アンケートから、特にスピーキング [やり取り] 指導に困難さを感じていることが分かっている。

このような不安や困難さを感じている教員に対して、何らかの支援が必要である。及川 (2019) が小学校教員を対象に実施したアンケートの中で、国や自治体に希望する支援等は何かを尋ねたところ、英語の指導方法や評価方法、英語力向上などに関する研修の必要性が浮き彫りとなった。さらに、こういった現職教員に対する支援が急務であるだけでなく、大学における教員養成の指導内容の充実化も叫ばれている。東京学芸大学が中心となり、小学校教員養成課程外国語 (英語) コアカリキュラムを開発し、具体的なモデル・プログラムを提示した (東京学芸大学, 2021)。そこには教科に関する指導法授業のシラバス案が複数掲載されており、15回という限られた授業数の中で、学習指導要領や子どもの第二言語習得、教材や評価などに関する知識と、実際の授業で用いられる指導技術を効率よく身につけられるように工夫されていることが見て取れる。特に指導技術の改善や習得を目的として、教科や校種を問わず、大学での教科教育法の授業では授業練習や模擬授業を行うことが多いが、それらのシラバス案にもやはり授業練習や模擬授業が組み込まれている。教職課程コアカリキュラムに記載されている「(2) 当該教科の指導方法と授業設計」を確認すると、到達目標の一つに「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。」 (文部科学省, 2017, p.7) とある。

模擬授業の実施に際して、石島 (2018) は、「初等家庭科教育法研究」という授業の中で、協働的に模擬授業を作成させたり、明確な役割分担のもとグループで模擬授業を行ったりして授業者の視点で学べるようにするだけでなく、模擬授業後に行われる質疑応答で課題を共有するなどを通して授業を受ける側の視点で学べるようにもしている。また、自律的な学習者を育てるという意味では、浦谷 (2018) は「教職実践演習」と「英語科教育法Ⅳ」の授業で実施した模擬授業に際して、ルーブリックを用いて学習の方向付けや自己改善の促進を試みている。模擬授業の振り返りについて、吉住 (2017) は、「英語科教育法」の授業の中で模擬授業を実施し、省察を段階的に行うことが指導法の知識の拡張や指導技術の向上に寄与すると示唆している。さらに授業改善の視点からは、倉知・木下・森井 (2018) が、スポーツ社会学科や外国学科の授業において、学生を教師役と生徒役に分けて模擬授業を実施したあと、教師役学生には自己評価シートを、生徒役学生には模擬授業を評価するための相互評価用紙を記入させるという活動を行っていることを報告している。これらの活動は、前述の到達目標に関連していると考えられる。

このように、模擬授業や模擬授業後の指導に着目した実践研究は多く行われている。一方で、模擬授業の前段階での指導については、議論が比較的少ないように思われる。その中でも事前指導の一例として、関 (2018) が、「英語科教育法A」の授業において、英語授業をDVDで視聴しながら、学生に指導手順の記録を取らせ、その記録をもとに指導手順を忠実に再現し、実演させることを計画していたことが挙げられる。関によると、授業時間の制約上、視聴した授業を再現させることに至らなかったとのことであるが、そういった各自の分析をもとに授業練習を行うことは、指導法を学ぶ上で効果的なステップとなると考えられる。とりわけ、授業者としてはおろか、学習者 (児童) としても小学校において英語授業を経験したことがない学生が受講する初等英語科教育法などの授業では、他教科の指導法を学ぶ授業以上に詳細なステップを設ける必要があるのではないだろうか。

2. 研究目的

そこで本研究では、初等英語科教育法で行う模擬授業の前段階において、まずモデル授業の動画を分析することで授業を見る視点を養い、次に、そこでの気づきを生かしながら、分析した授業を模倣することによる授業練習を行う。これらの活動を経験した学生にアンケートを実施し、回答を分析することで活動を評価することを本研究の目的とする。

3. 先行研究

模擬授業の前段階の指導として、授業を分析することが挙げられる。授業分析は、実際に学校に向き、授業を直接観察する場合と、授業が録画された動画を視聴する場合とに大別できる。青山・兼安・入江・納富（2020）は、「授業構築の理論と実践」というストレートマスター対象の授業において、授業分析の入門期にある学生が、必要に応じて繰り返し視聴したり、同じ視点から他者と共同で分析ができたりする点などを挙げ、動画を利用することの利点を述べている。この授業の中では、あらかじめ「教科の系統性」「学習者の成長」「指導者の意図および手立て」を授業の要素として確認した上で、それぞれがどのように関係しているのかを分析するために、どのような授業記録を作成すべきかを学生に議論させている。このような手立てを用いて授業分析力を向上させることが、授業案を考えたり、授業後に授業を振り返ったりする上で重要な役割を果たす可能性があることが分かっている（岡田・草原，2013）。他にも鈴木（2015）は、「英語科教育法」の中で、講義での理論学習と模擬授業による実践演習の間に名人教師による授業動画の視聴と分析を挟み込み、理論と実践のより円滑な橋渡しを試みている。この授業は、全15回の授業が前半と後半に分けられ、理論学習、次に授業動画の視聴と分析、最後に模擬授業と協議会という手順で進行している。この例では、授業プログラム全体における授業動画の視聴と分析の位置づけが、模擬授業の前段階であることが確認できる。

模擬授業の前段階の指導においては、授業分析に留まらず、実践的な練習も必要である。JACET教育問題研究会（2012）は、「模擬授業実践の前段階としては熟練教師の授業をビデオなどを用いて観察するのもよいし、同じ教育実習予定生や教科教育法履修者の中でよい授業をしている人を参考にし、それらを実践の際に真似してみることも効果的である。」（p.265）と述べており、他者の授業を模倣することの効果を示唆している。授業観察と模擬授業を連携させる具体例として、「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」（東京学芸大学，2021）では、実際の授業を「模倣」することが提案されている。視聴した授業動画の一部または全部を模倣し、模擬授業を行うということである。この活動の利点として、授業展開が決まっているため指導技術中心に議論や振り返りができること、自作ではなく模倣のため模擬授業に取り組みやすいこと、映像通りに行えなかった部分についての議論や振り返りを通し自分に不足している指導技術を意識化することができることが挙げられている。

これらを総合すると、模擬授業の前段階の指導として、モデル授業となる動画を視聴し、授業を分析した上で、分析した授業を模倣することによる授業練習を行うことは、指導法の基礎を体験的に学ぶ上で効果的であると考えられる。そこで、小学校での英語指導法を扱う授業の中でこれらを実践し、得られる成果を分析する。

4. 本研究

4.1 研究協力者

国立大学において、初等英語科教育法を受講している英語教育学専攻ではない大学生（主に社会科教育コース、家政教育コース、音楽教育コース、美術・書道教育コースの3年生）40人を研究の対象とした。全15回あるうちの第1回目の授業で、小学校での英語指導についての所感を把握するためにアンケートを実施した。実際に小学校で授業を行った経験がない学生にとって、小学校での英語指導に対して抱いている不安が、英語指導特有ではなく、授業全般に言える可能性があるため、実際に小学校で自分が指導すると想定した場合、どの教科等の指導に不安を感じるか尋ね、特に不安を感じるもの3つを選択する形式とした。その結果、外国語（英語）の指導に最も不安を感じている状況であることが分かった（図1）。上位にある教科等の指導に不安を感じる理由として、「自分が（選択した教科等を）苦手だと感じているから」「相応の知識がないから」「塾でアルバイト講師をしていて実際に上手に教えられないから」「教え方のビジョンが見えないから」などが挙げられ、特に英語については「自分が小学生の時に教科として指導を受けた経験がないから」という回答もあった。

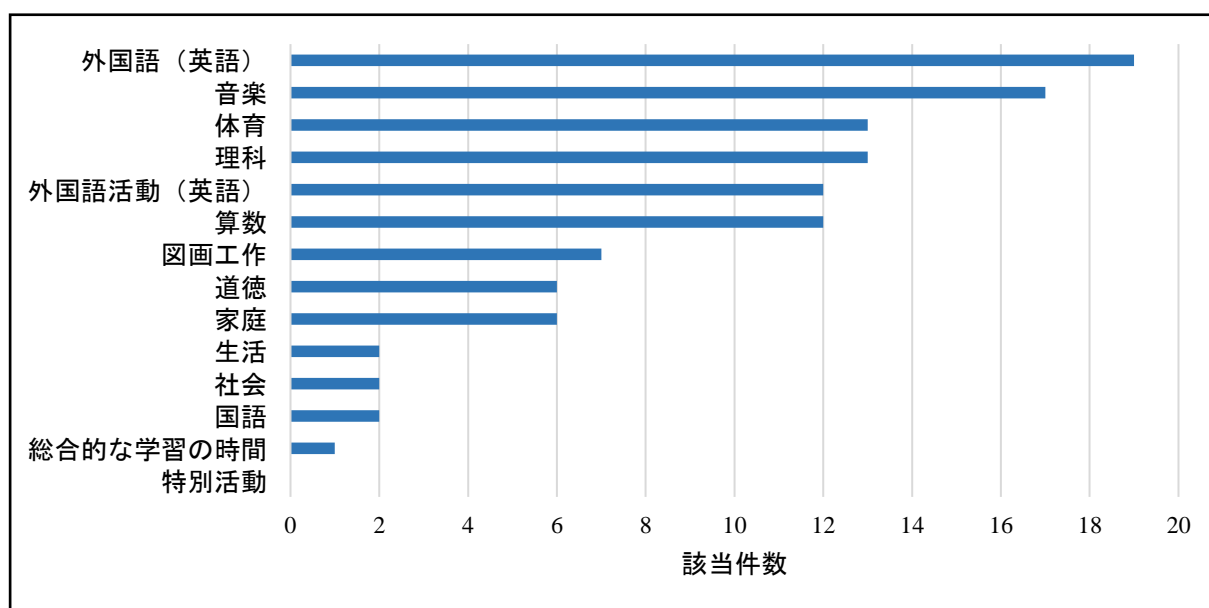


図1 指導に不安を感じる教科等（最大3つ選択）

小学校で英語を教える上で具体的に何に不安を感じるのかについては、図2のような結果となった。実際のアンケートでは、「とても不安」「少し不安」「どちらかという不安ではない」「特に不安ではない」の4つの選択肢から1つを選ぶ形式としたが、結果を分かりやすく解釈するために、前者2つを足したものを「不安である」、後者2つを足したものを「不安ではない」とした。結果から、自分自身の英語力、特に話すことに関わる部分に不安を感じる学生が多いことが分かった。また同程度に、「指導法」が挙げられている。どういった点で指導法に不安を感じているかを尋ねると、「学習初期であるため基礎を教えられるか分からない」「指導が失敗したときの影響が不安」「苦手意識を持たせてしまうかもしれない」「教え方をまったく知らない」「よい指導法がどのようなものなのか分

からない」などが挙げられた。やはり、小学校において学習経験がある他教科と異なり、授業を考える上で参考となるモデルがないため、具体的な授業を想像すること自体が難しい状況であることがうかがえた。

これらのことから、冒頭の米崎・多良・佃（2016）や株式会社イーオン（2021）の調査結果同様、本研究の対象とした学生も、英語面だけでなく、小学校での英語指導法についても大きな不安を感じており、細かなステップを設けた指導が必要であると考えられた。

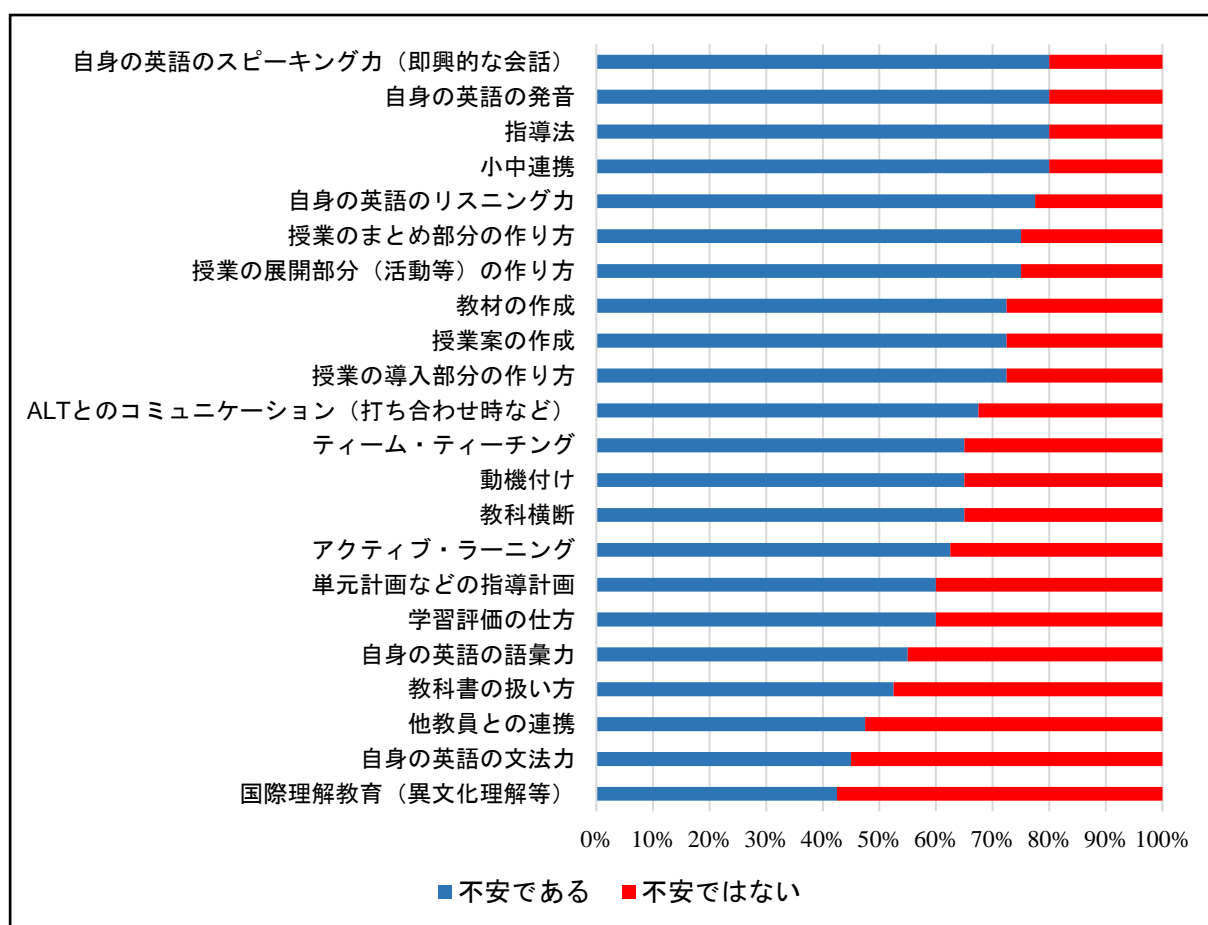


図2 小学校で英語を教えることに関わる不安要素

4.2 研究方法

2021年度前期開講の初等英語科教育法（全15回の授業プログラム概要は表1の通り）の中で実施した、モデル授業動画の分析（第1次）と、分析した授業を模倣することによる授業練習（第2次）の2回分の授業（各90分授業）を検証対象とした。本実践では、模擬授業の前段階の練習という意味合いのため、模擬授業ではなく授業練習という言葉を用いる。第1次には、学生はペアとなり、モデル授業の動画を視聴し、オンラインで共用できるホワイトボードアプリGoogle Jamboardを活用することで授業を分析した。第2次には、学生は同じペアで分析結果を整理しながら授業の視点をおさえ、各自

でモデル授業の模倣練習をし、次に4人グループを作り、その中でJTE（日本人教師）役、ALT（外国語指導助手）役、児童役を交代で演じることで、授業練習を行った。各授業後に「活動（第1次ではモデル授業動画の分析、第2次では模倣による授業練習）を通して、学んだことや考えたことはどのようなことか」を自由記述で回答する振り返りアンケートを実施し、分析を行った。有効な回答は、モデル授業動画の分析については39件、模倣による授業練習については34件であった。それらの回答を質的データ分析ソフトであるKH Coderを利用し、テキストマイニングを行った。結果に解釈を施し、本実践を評価することとした。なお、各アンケート実施の際には、研究結果の発表において個人が特定されることのないように処理し、研究終了後、適切な手段でデータを処分することを説明し、了承を得た。

表1 全15回の授業プログラム概要（本論文の中心は太字部分）

1. オリエンテーション等	6. 教材研究②	11. モデル授業動画の分析（第1次）
2. 学習指導要領の概観	7. ICT活用	12. 模倣による授業練習（第2次）
3. 指導の手順・指導案の構成	8. 指導方法と指導技術	13. 模擬授業準備①
4. 言語材料と4技能の指導	9. 教材・教具の活用法	14. 模擬授業準備②
5. 教材研究①	10. 評価のあり方・進め方	15. 模擬授業練習

4.3 実践内容

第9回までは、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンデマンド型のオンライン授業となっており、第10回以降、対面授業となった。第1回～第10回で主に知識（講義）を扱い、第11回～第15回で主に指導技術（演習）を扱った。最終課題は、各学生が作成したオリジナルの指導案のもと、各自で模擬授業を実施、録画し、動画の投稿・共有ができるオンラインのプラットフォームであるFlipgridに録画した動画を提出するということであった。その前段階の指導として、第11回の授業動画の分析（第1次）と第12回の模倣による授業練習（第2次）を位置づけた。

第1次の授業開始時に、2時間の中で行う活動内容や目的を説明し、共通理解を図った。教材となる授業モデル動画には、YouTubeにアップロードされている「文部科学省/mextchannel」の「小学校の外国語教育はこう変わる！⑤～題材の導入の仕方～」（<https://www.youtube.com/watch?v=9oE8ol0Dzfw>）を採用した。学生にコンピュータを持参させ、各自またはペアで繰り返しモデル授業動画を視聴できるようにした。モデル授業を視聴しながら気づいた点を書き出し、まとめるためにGoogle Jamboardを活用した。これは、コンピュータやタブレット上で使用できるホワイトボードのような機能を持つアプリで、リアルタイムでの共同編集が可能となっている。Google Jamboardでは、最大20フレーム（ページ）まで使用できる。今回は、最低限の分け方として「JTE」「ALT」「児童」「その他」の4枚を教員側で作成し、学習のプラットフォームとして使用しているMoodleから各学生が元ファイルにアクセスできるようにした。ペアのうち一人が代表でそれをコピーし、パートナーと教員をメールアドレスで共同編集者として招待することとした。教員が共同編集者となることで、教員の手元のコンピュータで各々の進捗が確認でき、また活動の途中でプロジェクターに繋いでスクリーンに投影することで優れたまとめ方をしているものを全員で共有することができた。あらかじめ設定しておいた時間になったら、別のペアと分析した視点について共有することとした。Google Jamboardを使用した学生による分析の一部を付録に示す。

各ペアでモデル授業動画を繰り返し視聴し、分析しながら、実際にその授業を再現するために授業の展開や参考にすべき教師の言葉などのメモを作成することとした。ただし、モデル授業動画で使われている教師や児童の言葉は、微細な言い間違いなどが含まれている可能性があるため、日本語、英語問わず一言一句そのままである必要はなく、言葉の役割や授業の流れを中心に模倣することとした。次回の授業で、作成したメモをもとに授業練習をし、グループ内でロールプレイをすることを確認した。

第2次の授業では、まず第1次で組んでいたパートナーとペアとなり、第1次で作成した授業のメモをもとに25分間、授業の練習をすることとした。個別練習開始前には、各自で練習がしやすいように、Moodle上で、モデル授業の中で使われていた教材用スライドと同内容のものを教員が作成し学生に提供したり、各場面を静止画で一覧にしたものを共有したりするなどの工夫を施した。ただし、言葉の役割や授業の流れだけでなく、声色や表情、教師の作る間についても模倣の対象であることは確認したが、具体的にどの場面のどの言動をどのように模倣すべきかについては示さなかった。

次に、既存のペアを2つ組み合わせ、4人グループを作成した。50分間の中で、JTE・ALT・児童の役割を毎回変えながら、1回の授業練習を10分程度とし、各グループで練習を進行するようにした。グループの中で演じる役割を変えながら複数回授業練習を行うことで、それぞれの役割の視点で同じ授業を体験できることを期待した。

5. 結果

第1次で実施した振り返りアンケートの回答をKH Coderを用いてテキストマイニングを行った。図3と図4は、その結果を共起ネットワークとして表したものである。本研究では、前処理で除外されることがある「私」や「思う」などの頻出語が自他を比較する可能性がある模倣の特性上、重要であると考えられたため、誤字脱字のみ確認し、分析を実施した。出力結果の中に含まれる円の大きさは単語の出現数を、線の太さは共起関係の強さを表している。共起関係は、語と語の関連性の強さを表す指標であるJaccard係数を用いており、係数の上位60を表示するよう設定した。また、グラフの各線上の数値はその係数を表している。数値が1に近ければ近いほど関連性が強い。結果の解釈に関しては、出現数が多い語が含まれる語群を中心に確認した。なお、テキストマイニングの結果をもとに、原文に適宜立ち返ることで本来の言葉の意味や文脈が損なわれないよう留意した。

図3は、モデル授業動画を用いた授業分析の授業後に実施した振り返りアンケートの分析結果である。総文数96文（総抽出語数2,802語、異なり語数496語）が分析の対象となった。囲い①に含まれる「授業」「児童」「動画」などの語群から、モデル授業動画を視聴することは、児童の学びの観点から授業の方法を学習する機会となっていることが分かった。実際の回答の代表例として、「英語の授業を見て、児童にとって分かりやすい授業を行うために、授業構成や態度など実に様々な工夫がなされていることが分かった。」というものが挙げられる。加えて、囲い②に含まれる「英語」「コミュニケーション」「伝える」などの語群から、英語授業内における言語使用に気付きがあったことが分かった。実際の回答の代表例として、「今回の授業で、ALTと共に授業をする実践方法について学ぶことができた。意図的に日本語を話し、英語での伝え方を考えさせるなど、英語の発音だけでなく、『伝える』というコミュニケーションに重点が置かれていることが分かった。」というものが挙げられる。

囲い①と②は、主にモデル授業の内容やそこからの学びに関することを表していた。一方、囲い③は、主に授業分析の活動そのものに対する記述であった。囲い③に含まれる「分析」「視点」「違う」などの語群から、教員がJTE・ALT・児童・その他という分析の大枠を示したことで、教師・児童それぞれの視点で授業分析をする機会となることや、他の学生と意見交流することで学びが深まる可能性があることが分かった。実際の回答の代表例として、「授業をJTE、ALT、児童の視点で分けて観察できたのは初めてだった。Google Jamboardでペアと共有することで、自分だけでは気が付かなかった視点や工夫している点などを見つけることができた。」というものが挙げられる。さらに重要なことに、「授業を再現するという視点で授業を分析したことがなかったため、教師の発言や振る舞いなど、より実際的な部分に注目して授業を視聴することができた。」という回答に代表されるように、授業の模倣をすることが前提となる授業分析について複数人が言及しており、この活動の流れがより詳細な授業観察を促す可能性があることも示唆された。なお、授業分析時にGoogle Jamboard上で行う「メモの分類に苦戦した」という感想が1件あったが、全体として、授業分析の活動に対して否定的な回答は見られなかった。

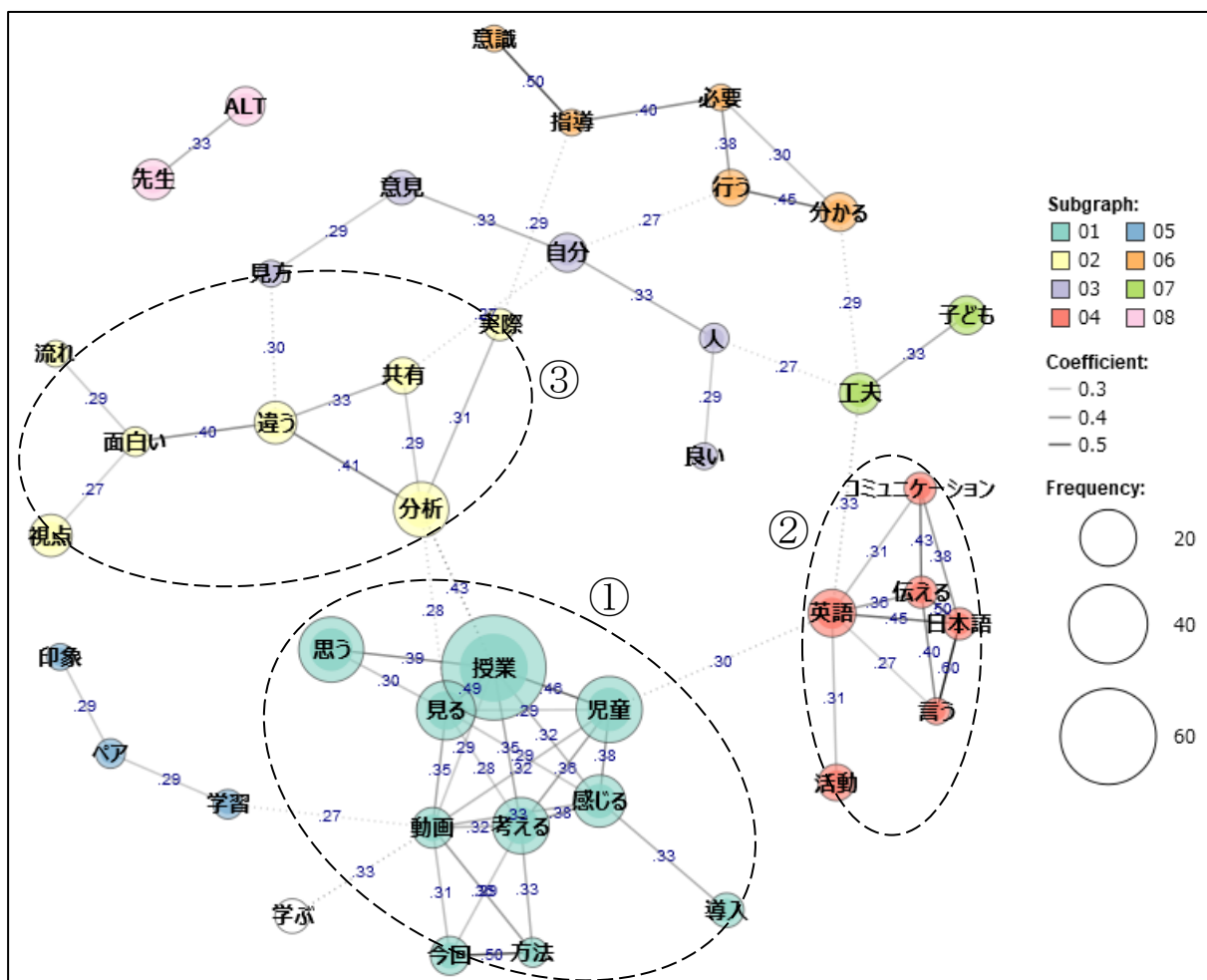


図3 「モデル授業動画の分析に関する振り返り（第1次授業後）」共起ネットワーク

図4は、分析した授業を立場を変えながら繰り返し模倣するという授業練習をしたあとに実施した振り返りアンケートの分析結果である。総文数91文（総抽出語数2,790語、異なり語数503語）が分析の対象となった。囲い④に含まれる「実際」「真似る」「多い」などの語群から、模倣による授業練習は学びが多いことで学生に肯定的に捉えられていることが分かった。実際の回答を確認してみると、「今までの教育法の授業では、授業を真似るということをしたことがなかったため、新鮮で楽しく、かなりためになった。」「真似ることで授業の流れや雰囲気をつかむことができた。」「誰かの指導法を真似てから自分の指導法を確立することが大切だと感じた。」「真似ることで得られることが多かった。」などが含まれていた。また、囲い⑤に含まれる「スムーズ」「展開」「実感」などの語群から、モデル授業を追体験することでスムーズな指導を実感できる可能性が示唆された。実際の回答の代表例として、「繰り返し真似しながら練習することで、どのようにスムーズに授業を展開していくのかを体験的に学ぶことができた。」「スムーズな展開のためには、話し方や目線を合わせることなど様々な重要な点があることを改めて実感できた。」というものが挙げられる。

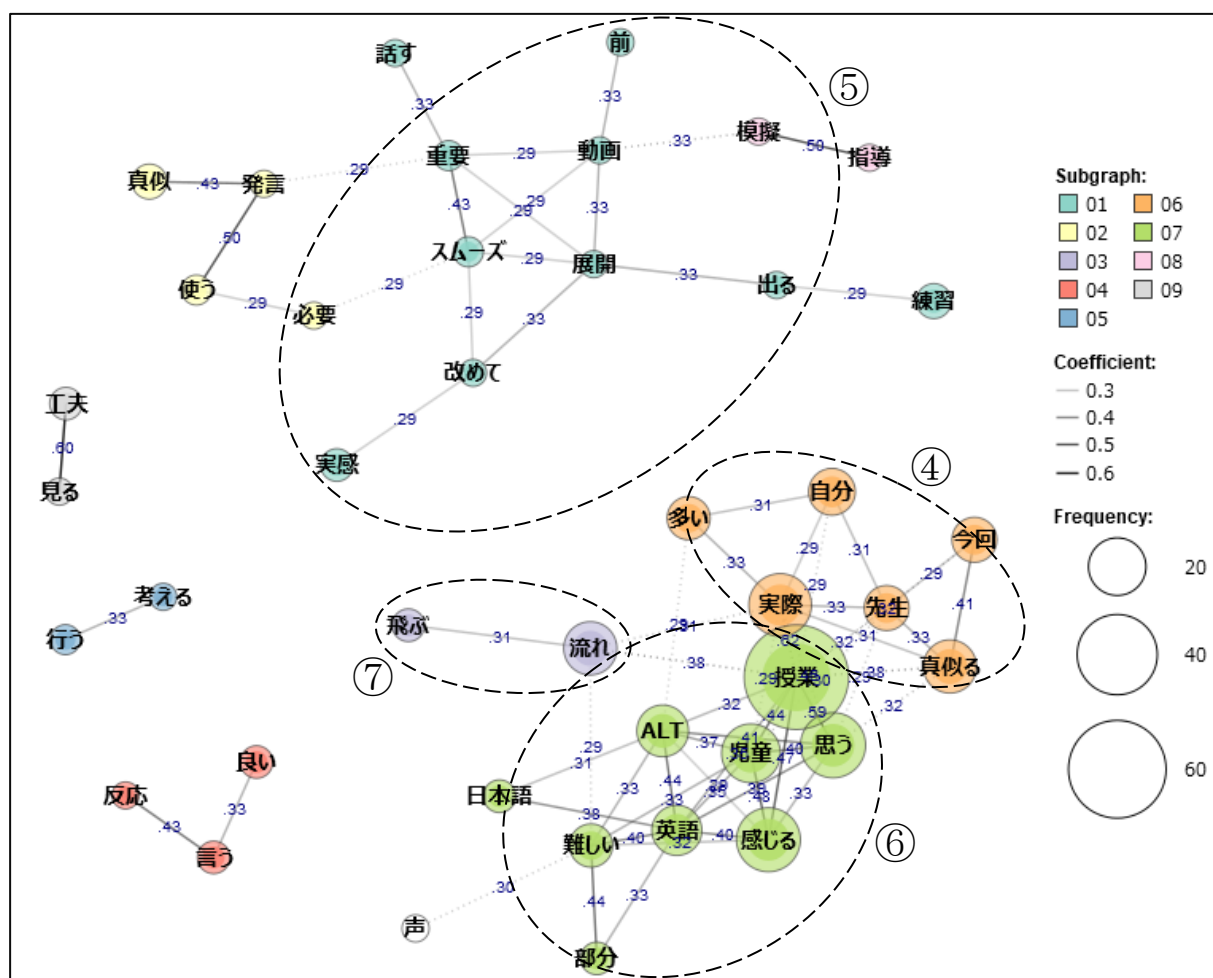


図4 「模倣による授業練習に関する振り返り（第2次授業後）」共起ネットワーク

一方、囲い⑥に含まれる「授業」「難しい」「感じる」などの語群から、授業を模倣することで、授業を行うことの難しさを感じたことも分かった。実際の回答の代表例として、「実際に授業を真似て練習してみると、話し方や児童への問いかけ方が難しいと分かった。」「児童役では、かなり授業の流れも把握できたが、いざ教師役になるとパニックになり授業の流れが飛んでしまったため、授業を行うのは難しいと改めて感じた。」などが挙げられる。このことに関連して、囲い⑦に含まれる「流れ」「飛ぶ」の語群を確認すると、「友人の前とはいえ緊張した。」「焦ると英語だけでなく、日本語も出てこなくなる。」「流れを頭で考えながら授業を行っていたが、想定していた流れから外れた瞬間にどう対応すべきかが分からず、しどろもどろになってしまった。」などの回答が含まれていた。

6. 考察・結論

最後に、得られた結果をもとに考察することで本活動の評価を行い、成果を検討する。本研究では、初等英語科教育法において、最終課題である模擬授業の前段階の指導として、モデル授業動画の分析を行い、次にモデル授業を模倣することによる授業練習を行った。各授業後に実施した振り返りアンケートの回答を分析した結果、特に授業の模倣を前提とした授業分析がより詳細な授業観察につながる可能性が見出されたことについて、授業を緻密に再現しようとするほど、その傾向は高まると考えられる。教師の発した言葉を例に考えると、言葉の意図や理由を汲み取るために、その言葉を発した場面や言葉の発し方（速度、強さなど）、付随する表情やジェスチャーをくまなく分析する必要があるだろう。

加えて、モデル授業の迫体験の観点からは、スムーズな指導を実感できるという利点が見出された。優れた指導手順が掲載されている学習指導案やそれに基づいた授業の観察などだけでは、実感までは行きつかないだろうと思われる。学生が自作した授業案をもとに模擬授業を行う前に、優れた授業の展開を体感しておくことは有益であろう。前述の東京学芸大学（2021）が、モデル授業とその模倣を試みた授業を比較することで不足している指導技術を意識化することができると述べているように、スムーズな指導を実感できなかった場合もその原因を探るなど振り返りを行いやすい。

他方、模倣による授業練習によって、授業を行うことに困難さを感じた学生がいたことも分かった。これは、モデル授業が優れた実践であるがゆえに、完全な再現が困難であることが関係している可能性がある。本実践では、一回のみの模倣による授業練習であったため、必ずしも十分な模倣ができたとは限らない。模擬授業に至るまでにより丁寧に段階を踏むためには、例えば、一回の模倣による授業練習にさらに時間を割くか、練習の機会を複数回設けるなどできるように、授業プログラムや各回の授業構成を工夫することが考えられる。他にも、一回の模倣による授業練習については、モデル授業の中身を細分化し、指導場面ごとで練習を行うことが考えられる。

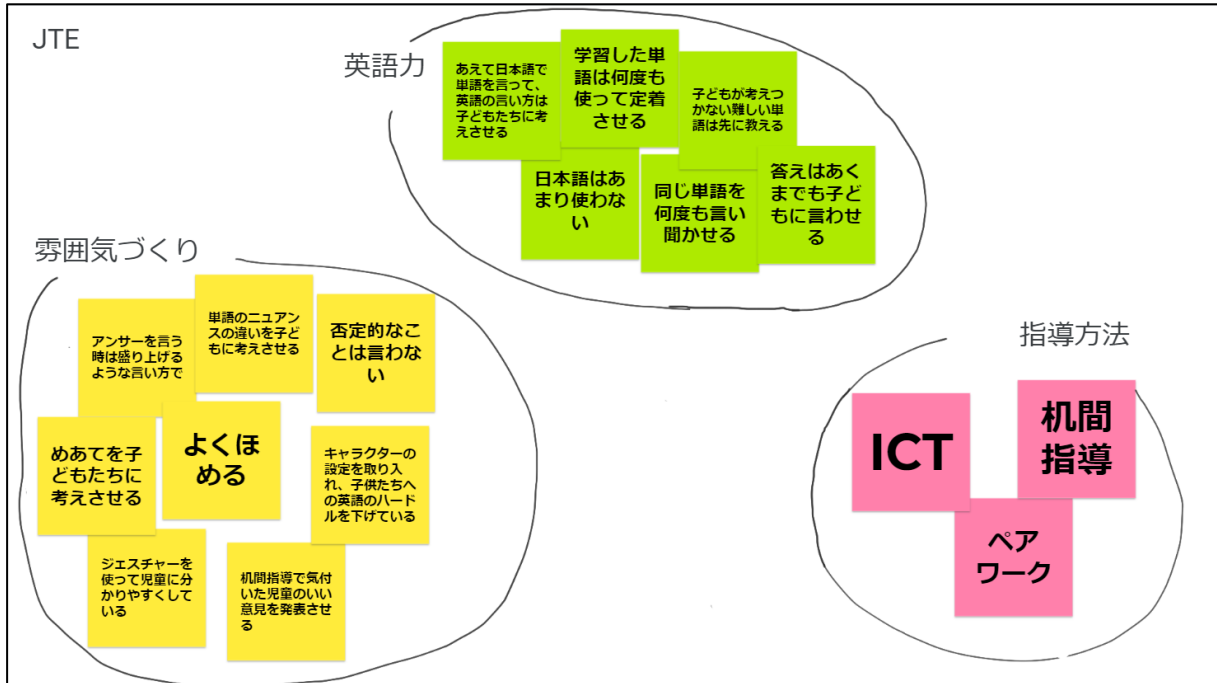
本研究の限界として、一回のみの実践から得たアンケート結果の分析であることや、異なる条件を設けるなどの比較対象のある実験ではないことが挙げられる。本研究から、主に指導の段階や活動内容の観点において様々な可能性は確認できたが、確証を得るためにさらなるデータの収集や分析が必要である。

引用文献

- 青山之典・兼安章子・入江誠剛・納富恵子 (2020) . 「動画を活用した授業分析演習とその効果」『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』10, 1-11.
- 飯島広美・岡田珠江 (2019) . 「教員養成課程における「授業力」の形成と向上のための方策 (3) : 教材研究から模擬授業・振り返りまでのサイクルモデル」『湘南工科大学紀要』53 (1), 91-104.
- 石島恵美子 (2018) . 「大人数授業における模擬授業を取り入れた指導法の検討: 模擬授業実施に全員が関わることによる教育効果に注目して」『教授学習心理学研究』14 (1), 24-39.
- 浦谷淳子 (2018) . 「教職を目指す大学生の模擬授業におけるルーブリックの提案」『浜松学院大学研究論集』14, 19-33.
- 及川賢 (2019) . 「小学校外国語に対する教員の不安と今後の研修内容へ向けての提言—英語教育強化事業を経験した地域でのアンケートから—」『埼玉大学紀要教育学部』68 (2), 465-485.
- 岡田了祐・草原和博 (2013) . 「教員志望学生にみる社会科授業分析力の向上とその効果」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』62, 61-70.
- 株式会社イーオン (2021) . 「小学校の英語教育に関する教員意識調査 2021」
https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_210315.pdf (参照日 2022年2月8日)
- 倉知典弘・大下浩司・森井康幸 (2018) . 「授業力向上に向けた模擬授業改善の試み: 授業評価尺度の作成と有用性の検討」『吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系)』28, 143-156.
- JACET 教育問題研究会 (編) (2012) . 『新しい時代の英語科教育の基礎と実践成長する英語教師を目指して』三修社.
- 鈴木幸平 (2015) . 「授業ビデオの有効活用及び模擬授業の効率的な実施: 英語科教育法における講座改善の一つの試み」『常葉大学研究紀要 (教育学部)』35, 187-198.
- 関典明 (2018) . 「『授業を英語で行うことができる』実習生を育成するために: 模擬授業の事前・事後指導」『成城大学教職課程研究紀要』1, 65-102.
- 東京学芸大学 (2021) . 「『英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発』報告書」http://www.u-gakugei.ac.jp/~coretgu/pdf/koakari_honbun.pdf (参照日 2022年2月8日)
- 文部科学省 (2017) . 「教職課程コアカリキュラム」教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (平成 29年 11月 17日) .
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
(参照日 2021年9月9日)
- 吉住香織 (2017) . 「英語科教育法における模擬授業と学びに関する考察」『立教大学学校・社会教育講座教職課程教職研究』29, 93-113.
- 米崎里・多良静也・佃由紀子 (2016) . 「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安—その構造と変遷—」『小学校英語教育学会誌』16 (1), 132-146.

付録

資料 (1) Google Jamboard を使ったペア A の JTE に関する分析



資料 (2) Google Jamboard を使ったペア B の児童に関する分析

